

老人大学長賞

「しみずのプールにいったよ」

ゆあさしょうがつこう 一ねん さかした こはる

わたしのじいじは、とてもやさしいです。なぜかという、じいじに「あした、しみずのプールにこう。」と、わたしがいうと、じいじは、「よーし。あしたいこう。」と、いつ、つれていってくれるからです。プールに行くときも、「コンビニ」によって、じいじは、「すきなものかってきな。」といって、おねえちゃんにおかねをわたしました。みんなすきなおかしをかってもらいました。とてもうれしかったです。プールでたのしくあそべてうれしかったです。

じいじは、「また、つれていつちやらよ。」と、いつてくれました。

わたしは、じいじにふしぎにおもって、どうして、あそびにつれていってくれるのかききました。じいじは、「こうちゃんのことかすきだから。」と、いいました。そして、みんながたのしいと、じいじもたのしくなるとおしえてくれました。わたしは、げんきがないときあそんでいるともだちにげんきをもらうのといっしょだと、おもいました。

またいっしょに、しみずのプールにいきたいです。

社協会長賞

「ばあばとすごすきせつ」

湯浅小学校 二年 小の田 百か

夏休みがはじまったころ、ばあばが、

「うめ出そか。」

と言いました。六月にはあばといっしょにつくったうめのシロップが、できあがったみたいです。大きなビンにたくさん入れた、青いうめとこおりぎとう。あんなにたくさん入れたのに、一か月たつと、青うめはシワシワにしぼんで小さくなっていました。まわりには黄色くてトロトロのえき体がたつぷり。あまーいうめシロップのできあがりです。たくさん水やヨーグルトにまぜて食べると、とてもおいしいです。わたしはあばのうめシロップができると、夏がきたなあとかんじます。

ばあばは、行じにあわせて、きせつの食べものや、かざりをつくってくれます。たとえば、九月にはお月見があります。月見だんごとススキと、おそなえものをかざってくれます。おそなえものは、にんじん・きんかん・かんてん・れんこん・ぎんなん・いんげん・なんきんがあります。まどべでお月さまを見ながら月見だんごを食べると、

「すすしくなってきたなあ、あきになるんだなあ。」

とかんじます。わたしが、

「なんで『ん』がつくおそなえもののばっかりなん？」

と聞くと、ばあばは、

「人生によい『うん』がつくようにおねがいしてるんやよ。」
と教えてくれました。

おそなえしたやさしいは、天ぷらやりようりにつかってわたしたちにおすそわけしてくれるのもうれしいです。

これから、いろんなきせつをばあばといっしょにすごしていききたいです。

老人クラブ会長賞

「おじいちゃん おばあちゃん」

田村小学校 三年 太田 さ来

わたしが、帰ってくると、「おかえり。」と言って出むかえてくれます。だれもない時は、なんだかさみしいけれど、「おかえり。」と、言ってもらうとすごくうれしいです。おじいちゃん、ひざがじんごうのひざなので、こけるとおきあがることができません。だれかをよんでおこしてもらうようにしないといけません。だから買い物に行く時はこけないように気をつけて行つてほしいです。

おばあちゃんに足、こしがいたいと言いながら、にわのそうじや草ひきをしてしてくれます。お花も植えてくれて、にわがきれいになり、気持ちがいいです。

おばあちゃんの友だちも「大きくなったね。」などいろいろと話をしてくれます。少しはすかしいけれど、あいさつをきちんとして、次はもっと話ができるようにしたいです。

おじいちゃんもおばあちゃんも長生きして、もっといろいろな話を聞かせてほしいです。

湯浅町長賞

「ひいおじいちゃんありがとう」

田村小学校 四年 蜂谷 しゅう太

ぼくのひいおじいちゃんは、今年で九十さいになります。

ひいおじいちゃんは、さいきん元気がありません。体力が落ちてきたみたいです。元気だった、ひいおじいちゃんと過ごした時間が、楽しかったので、少しぼくは、さびしい気持ちになります。

昔はほ育所にひいおじいちゃんが、軽トラックで、おむかえに来てくれました。帰りみちは、ドライブをよくしてくれました。海や山の景色が見れてとてもきれいでした。

そして、ぼくが小学生になるまでさん歩をよくしてくれました。晴れた日のさん歩は、気持ち良かったです。さん歩をしながら、ひいおじいちゃんの昔の話をしたり、ほ育所で今日楽しかったことを話したりしました。

その時間がぼくにとって、楽しかった記おくとして、今でも覚えています。

ほ育所で、食べた給食の話をして、美味しかったものが何か話したり、おやつのお話をしたり、遊び時間に、

「今日は、絵を描いたよ。」

とか、

「すべり台を、いっぱいすべったよ。」

という話をひいおじいちゃんに話したりしました。いつも笑顔で、聞いてくれました。あと、よく戦争のお話をしてくれました。少年時代のひいおじいちゃんは、大変な思いをしたと、ぼくに話してくれました。戦争中で、いっぱいだんや、ミサイルで命を落とすか、分らない状況だったそうです。食べる物がほとんどなくて、いつもお腹をすかせていたみたいです。ぼくには、そんなけいけんがありません。ぼくだんがいきなり、空から落ちてくることもないし、ご飯が食べられなくてこまるというけいけんもありません。だから、ひいおじいちゃんの戦争の話を聞いて、今の時代が、平和で良かったと思います。戦争で、たくさんの方がなくなつたと聞きました。すごく、悲しいことです。ひいおじいちゃんの戦争の話は、大事に、わすれないようにしようと思いました。ひいおじいちゃんには、昔、色々なろうをしてるから、美味しいものをいっぱい食べてお酒をへらして、長生きしてほしいです。なぜなら、ぼくが十八さいになったら、車のめんきよをとって、海や山の景色がきれいな場所に旅行に行ったり、一緒に美味しいものを食べたりしたいからです。

今度は、ぼくにこまったことがあったら、教えてね。今はまだたよりないけれど、たよれるそんざいになれるように、がんばるね。これから、ぼくとひいおじいちゃんの違いをいっぱい作ろうね。

湯浅町議会議員賞

「大切なおじいちゃん」

湯浅小学校 五年 宮井 優空

ぼくは老人福祉について考えるとき、身近なおじいちゃんのことを思い出します。おじいちゃんは六十さいをこえていますが、今でもちいきの集まりで卓球をしています。どういうきかけで始めたのかは分かりませんが、ラケットを持って打ち合う姿はとても楽しそうで元気に見えます。

また、ぼくは今でもよくおじいちゃんと川に行きます。魚をつかまえたり、一緒に泳いだり、キャンプをしたりして過ごす時間は楽しく、大切な思い出になっています。夏は川の水が冷たくて気持ちよく、行くのが楽しみです。おじいちゃん元気な姿を見ると、ぼくもしげんと笑顔になり、これから長生きしてほしいと強く思います。

老人福祉とは、介護や支援だけでなく、こうれいしゃが健康で生き生きとくらせることを支えることだと思います。ぼくもこまっているこうれいしゃを見かけたら声をかけたり、小さな思いやりをわすれずにこうどうしたいです。おじいちゃんのようにみんなが笑顔で毎日をすごせる社会になってほしいです。

湯浅町教育長賞

「やさしさに包まれて」

湯浅小学校 六年中本 葵

私は今年、市町村対抗ジュニア駅伝の三区を走りました。普段は水泳をしているので、体力には自信があったし、走ることも好きだったので、力走して町を元気にしたい！とか、チームにこうけんして一つでも上の順位を取りたい！と思い、一生懸命練習に取り組みました。先生方もみんな熱心に指導してくれました。私も期待に込えたかったし、少しでも速く走ってチームにこうけんしたかったけど、その日の私はダメダメでした。いくら腕をふつても、いくら足をふみ出しても、全く前に進みませんでした。変な汗は出てくるし、目はぐるぐる回っている感じでした。何とかたすきをつながないと、という気持ちだけで懸命に腕をふり、足を前に出しました。案の定、期待してもらった結果とは真逆の結果になってしまい、応援してくれた人達に申し訳ない気持ちと、その日ががんばれなかった自分への情けない気持ちで、心が押しつぶされそうでした。駅伝のことを思い出すことも、走ることも怖くてずっといやでした。

何日か経ち、下校している時、近所のおじいちゃん、おばあちゃん達が声をかけてくれました。「よう走ってくれたなあ、葵ちゃんの走るん見てたら涙出てきたよ。長生きせなあ、ありがとうよ。」と目に涙をためて、手を握ってくれました。不甲斐ない結果を怒られるのかと思っていた私はきよんとしてしまいました。怒られるならまだしも、「ありがとうよ。」なんて言ってもらえると思っていなかったからです。しかも、その姿を見て長生きしたい、と思ってくれていたなんて、想像もしていませんでした。心の中で「ありがとうございます。」と何度も思いながら家に帰りました。

その後も、多くの町の人から走ったことへの労いの言葉をかけてもらいました。みんなの温かい言葉が、こおりついた私の心を溶かしてくれるのを強く感じました。何事も一生懸命取り組んでも、結果が上手くいかないことだってあります。勝負には勝ち負けがあつて、いつも勝てるわけじゃないし、悔しくて悔しくて立ち直れない時もあります。

でも、私はあの日おじいちゃんやおばあちゃんが手を握ってくれたこと、かけてくれた言葉の温かさをわすれません。私はまた新たに挑戦することを決意することが出来ました。これから、感謝の気持ちを忘れず、何事にも前向きに挑戦していきます。

周りに、落ち込んだり、傷ついている人がいたら、今度は私がやさしさを包んであげられるように成長していきたいです。

社協会長賞

「『見守る』という福祉」

湯浅中学校 一年 吉田 真里奈

私のおじいちゃん、今年で八十三歳になる。昔から、畑でみかんを作り続けてきた人だった。

季節が巡るごとに土の匂いとみかんの甘い香りがしていた。おじいちゃんの手はいつも黒くて、その分実ったみかんはまるで黄金のようにきらきら輝いていた。

「みかんは育てるんやなくて、見守るもんや。」

そんな言葉を今でも心に刻んでいる。けれど高齢になった今、おじいちゃんは畑に立つことをやめた。みかんの木は残っているけど、だれもその世話はしなかった。本当は父がおじいちゃんのみかん畑を受け継ぐと言われていた。けれど、いろいろな事情が重なってそれは取り消しということになった。畑は静かになり、みかんの木は少しずつ葉を落としていった。それでも私は、おじいちゃんを作りあげたみかん畑がだれかの手によって見守ってくれることを心から願っていた。そして、私は知らないだれかが、おじいちゃんの畑を受け継いでくれることになった。それを聞いて私はほっと安堵した。けど、おじいちゃんにとってみかんを作ることはただの仕事ではなかったと思う。それは「生きている実感」だと思っている。けれど、年を重ねるごとに畑に立つ時間は減っていった。ここで私はふと思ってしまった。「もう歳だから」そう言って、得意だったことを手放していく。でも本当はまだできることはたくさんあるはずなのに。家族が受け継がなかったことにだれも責める気持ちはない。それぞれの道があって事情があるのも知っている。もし、地域や家族が、もう少しだけ寄り添えたら。「引退」ではなく「見守り」に変えられていたら。高齢者が持つ知識や経験は、今の若者にとって「育てる力」になるのだと思う。私はまだ中学生だけど、見守る目を持ちたい。おじいちゃんが大切にしていたみかん畑が忘れられない風景になるように。

みかんを作らなくなっても、おじいちゃんの人生はそこで終わったわけじゃない。その経験は私たちにとっての「支え」や「学び」になっている。高齢者が歩んできた人生の道には私たちの目では見えない宝物が埋まっていると思う。私たちにできることは、ただ「受け継ぐ」だけじゃない。その思いに耳を傾け、そばにいたい。それも福祉の一つなんだと思う。おじいちゃんが静かに笑う。私はただそれを大切にしたい。

社協会長賞

「笑顔、光輝く湯浅町に」

湯浅中学校 二年 森山 心琴

「私ら高齢者にとって、こういうサービスは、たいへんありがたいよ。」

これは、私のおばあちゃんが、湯浅町社会福祉協議会で行っている配食サービスでいただいた弁当を食べている時の一言です。その日は定期テスト中だったので給食を食べずにご飯を帰ってきました。こんな日は、だいたいおばあちゃんが料理をつくってくれるので、手伝おうとおばあちゃんのところへ行くと、「今日は社協の人からお弁当をもらったんよ」とにこにこしながら言っていました。そのお弁当は、できたてで温かく、食材の大きさや栄養バランスにも気をつけられていました。おばあちゃんとおじいちゃんは、「めっちゃおいしいよ」とうれしそうにお弁当を食べていました。私も少しもらって食べてみると、とってもおいしかったです。

私の祖父母以外にもこのサービスをうれしく思っている人はたくさんいます。私は、夏のボランティア体験に小五の時からずつと行っていて、その度に配食サービスを利用して高齢者の方々のところへ行きます。その時は、「いつもありがとう、うれしいよ」というも高齢者のみなさんが笑顔で言っていました。

私は、この経験から、配食サービス一つでも、高齢者さんたちの助けになっていて、喜んでくれるのだと感じました。高齢者の方は、自分たちと違って、足腰が悪くなったりして動くのも大変になってくるので、買い物や料理はすぐきつくて大変な作業です。その作業を配食サービスで一日でもなくすることができたら、高齢者の方にかかる負担を少しでも減らすことができます。そうすると、高齢者のみなさんの笑顔が増えていくと思います。

私は、配食サービスだけでなく、高齢者のことを一番に考えたサービスやイベントなどをもっとたくさんの人に知ってもらわなければならないと思います。今、少子高齢化が進んでいる湯浅町ではもちろん、これから少子高齢化が進行していく日本のいろんな人に知ってもらうことでまずは、高齢者の方々が住みやすく、楽しんで暮らせる町や国をつくっていかれると思います。そうすると笑顔が増えて、若者にも広がっていく、明るく楽しい国をもつことができると思います。

そんな国をつくるために私は、自分たちの湯浅町を高齢者の方々が住みやすいと感じられる町にしていく一員になりたいです。そのために私は、周りの人にサービスをひろめたり、困っている高齢者の方を見つけたら、声をかけて話を聞いてあげたりしたいです。また、高齢者の方と関わったりするボランティア活動には積極的に参加するようにしたいと思っています。

いろんなサービスやイベント、一人一人の意識や考えで湯浅町がさらに住みやすく、笑顔いっぱい町になりますように。

公民館長賞

「広がれ、私達の光」

湯浅中学校 三年 吉田 和佳奈

ある日、社会の授業で日本は高齢化が進んでいると学びました。その後、そのことが頭の中に残り、現在の状況について調べてみました。総務省統計局のデータによると六十五歳以上の高齢者の割合は約三十パーセントとのことでした。私が住んでいる湯浅町でも高齢化が進み、身近な問題となっています。今後さらに高齢化が進み、日本は高齢化社会となっていくでしょう。お年寄りのために私達が出来た事は何かと考えていると、一つの思い出が頭の中に浮かんできました。

私は小学校三年生のころから和太鼓グループに所属しています。お祭りや行事などと呼んでいたとき演奏をすることがあります。とある三月末の日、私のグループは老人ホームで演奏会を開くことになりました。今まで何度か別の老人ホームにお邪魔し、演奏させていただくことはありましたが、その時は初めての場所で演奏させていただくことになっていました。初めての場所でも何度か経験したことのある演奏会だったので特に緊張もすることはありませんでした。そして当日、いつもと少し違うことが起こりました。初めてアンコールを求め、声が上がったからです。初めての反応に驚きましたが、私達の演奏が喜んでもらえた気がしてとても嬉しかったのを今でも覚えています。思い返せば、演奏を聴きに集まっていたいたお年寄りの方や介護士さんの中には手拍子で楽しむ方や、体を揺らしてリズムをとる方も見られました。そして私は、自分達の演奏でお年寄りの方々や介護士さんに元氣を与えることが出来たのだと気づきました。私達の元氣や明るさがお年寄りの方に向けて出来る贈り物の一つで私達が出来ることの第一歩であると分かった一日でした。和太鼓の演奏会だけでなく、普段の生活で祖母の家に遊びに行った時には、孫が来るとにぎやかで雰囲気明るくなり、元氣がもらえるとよく言ってくれます。また年末になると小・中学校で町内のお年寄りの方に向けて年賀状を書きます。ある年お返事が返ってきて感謝の言葉とともに私に向けてエールの言葉が書かれていました。その時お互いに元氣づけ合うこの関係がこれからの生活でささやかな、しかし人の温かさに気づかせてくれる重要なことではないかと思いました。私達中学生がお年寄りの方々のために大きなことをするには力が足りず難しいでしょう。しかし、どんなに小さなことでも私達の元氣や明るさで心やさしい光をとることが出来ます。始めの一步は踏み出しづらいかもしれませんが、勇氣を出して周囲の雰囲気を変えていくことが私なりの福祉の一つだと考えます。